

下野市立祇園小学校

1 学校課題

「自ら考え解決する子どもの育成」 ～国語科・理科を中心に～

2 研究計画

本年度は、国語科や理科で児童の「書く力」の育成を通して児童の思考力の向上を図る研究と実践を行う。研究を進めるにあたり、主体的・協働的に学べるよう自己解決能力と自己の学びへの自信を深めさせながら、「アクティブラーニング」等の学習活動も工夫することとした。また、学習評価のうち、評価規準の設定や評価の方法の工夫改善についても引き続き研究を深めていくことにした。この研究は、2つの方向から取り組んでいく。

(1) 「書くこと」を手段として、思考力を高める」

書く活動を通して、「思考力・判断力・表現力等」を育成し、学習の広がりや深まりを目指す。

- ① 国語科や理科における「書くこと」を通して、表現力を豊かにし、語彙力を伸ばすように、また児童一人一人が確実に習得できるように指導を工夫する。
- ② 思考力・判断力・表現力等を高めるために、課題に対して自分の考えをもち、筋道を立てて考えを書く活動を取り入れ、個々の考えをより確かで深いものにしていく。
- ③ 予想と観察・実験の結果を対比させて考えさせたり、結果とまとめを区別して書かせたりと「書く」時間を十分確保した授業を展開する。
- ④ 学習評価における観点「思考・判断・表現」において、評価規準や評価方法の妥当性・信頼性について検証を図る。

(2) 「主体的に、学習に取り組む力を育てる」

学びの主体者となるべき児童が課題意識をもって学習に取り組んでいくために、問題解決的な学習活動を取り入れた授業を実践する。

- ① 自力解決のための時間と場を設定し、自分なりの考えをもちたせるような意図的な展開をする。
- ② 児童が必要感や自己有用感をもつような学習活動や学習形態を工夫する。
- ③ 互いの考えの交流を通して、思考の深まりや広がりが見られるような指導の展開を工夫する。
- ④ 学習の主体者としての自覚をもち、主体的・協働的に学習できるように見通しをもった問題解決的な学習を構成し実践する。

3 研究内容

研究は、全職員を2つの部に分けて取り組んだ。

(1) 授業研究部

低・高学年ブロックに分かれ、各学年で一つの教材を選び、事前授業と公開授業を行った。教材研究の段階からブロック協議を行うとともに、外部アドバイザーの参加を依頼し、指導・助言を受けた。



【授業研究会】

ブロック	学 年	日 程	単元名	外部アドバイザー
低学年 (国語科)	第2学年	6月28日	スイミー	平山裕美副主幹 (県教委)
	第3学年	11月30日	食べ物のひみつを教えます	八巻修教諭(宇都宮大学附属小) 稲葉亜希恵指導主事(市教委)
高学年 (理科)	第4学年	7月12日	夏の生き物	綱川淨恵学力向上アドバイザー (県教委) 稲見雄太指導主事(市教委)
	第5学年	6月28日	メダカのたんじょう	田澤孝一指導主事(市教委)
	第6学年	9月14日	水よう液の性質	人見久城教授(宇都宮大学) 田澤孝一指導主事(市教委)
特別支援 (国語科)	ひまわり	11月16日	お話を楽しもう	校内公開授業のため、依頼なし

(2) 教材開発部

① 国語科

国語科では、環境整備や今年度授業研究を实践した2年『スイミー』と3年『すがたをかえる大豆食べ物のひみつを教えます』の学習活動に関する学習資料を中心に行った。

ア 言の葉広場の設置

イ 「書く力」を育てるための例示

ウ 「書く力」を育てるための段階的なワークシートの作成



② 理科

理科では、2つの取組を行った。1つ目として、授業実践を通して、「問題⇒仮説⇒検証方法⇒結果⇒結論」（各段階の名称は学年によって異なる）という問題解決の活動の流れを確認した。2つ目は、薬品の取り扱いや器具の活用の職員向けの研修会を実施した。

ア 問題解決活動の流れの検証

イ 職員研修の実施

(薬品の取り扱いや調合の仕方、各種器具の使い方の研修)



4 本年度の成果と課題

(1) 研究の成果

① 指導案検討会や授業後の研修会については、「ブロックでの指導案検討会の機会が多く取られていたので、話し合いが十分できた。」「よりよい指導法を開発することができた。」「グループ討議では、いろいろな意見を聞くことができ、勉強になることが多かった。」「グループ討議の形態は、全員が主体的に意見を言うことができ、考えも深まった。」「話し合いの視点と対象児童が明確になっていたことで、意見を出しやすかった。」等の成果が上げられた。

② 今年度は、論理的思考力を高め、判断力・表現力の育成を図るために「言語活動の充実」を進めてきた。目的意識をもたせる・めあての提示・表現の型の提示・振り返りの時間の確保・「一人学び」「集団学び」などの思考を深める場の設定等、指導に必要な事項を全員で共通理解した。それらを授業に取り入れたことで、児童の書く力が向上しつつある。また、語彙を増やす環境づくりにも努め、表現に必要な語彙力も向上した。相手や目的をはっきりさせることで、書く必然性とともに意欲も生まれ、子どもたちの自己有用感にもつながった。

③ 評価方法への取り組みについては、「評価の視点と対象の児童が明確になっていたことで、見取りやすかった。」との肯定的な意見が多かった。

(2) 課題

① 書く力の育成を図るためには、各学年における目標を明確にし、系統立てて指導する。また、語彙を増やす指導や理科の事実と思考を分けて表現する指導を研究する。言語活動が目的ではなく、思考力を育てる手段としての言語活動となるよう授業を組み立てていく。

② 研究会の持ち方については、今年度の形式を継続しつつ、授業の視点をもとに話し合い、内容を共有できるようにする。

③ 評価について、今年度、参観者に児童の学習グループを割り当て、担当グループの児童の変容を見取る方法をとった。この評価方法は、一児童の変容やその児童への教師の支援を見取ることは可能であるが、教室全体の児童の様子や教師の支援は見るのが難しいという意見があった。評価方法への取り組み方の改善が必要である。

